



日语教育与日本学研究

——第5届大学日语教育研究

国际研讨会论文集

……主 编 / 刘晓芳 副主编 / 徐 曙 蔡敦达



华东理工大学出版社



日语教育与日本学研究

——第5届大学日语教育研究

国际研讨会论文集

主 编 / 刘晓芳 副主编 / 徐 曙

蔡敦达



华东理工大学出版社

图书在版编目(CIP)数据

日语教育与日本学研究——第5届大学日语教育研究国际研讨会论文集/刘晓芳主编. —上海: 华东理工大学出版社, 2010. 11

ISBN 978-7-5628-2932-4

I. ①日... II. ①刘... III. ①日语-语言教学-文集 ②日本-研究-文集 IV. ①H369-53
②K313.07-53

中国版本图书馆CIP数据核字(2010)第225175号

日语教育与日本学研究
——第5届大学日语教育研究国际研讨会论文集

主 编 / 刘晓芳

副 主 编 / 徐 曙 蔡敦达

责任编辑 / 苏 靖

责任校对 / 金慧娟

封面设计 / 戚亮轩

出版发行 / 华东理工大学出版社

地 址: 上海市梅陇路130号, 200237

电 话: (021)64250306(营销部)

(021)64252717(编辑室)

传 真: (021)64252707

网 址: press.ecust.edu.cn

印 刷 / 江苏句容市排印厂

开 本 / 787mm×1092mm 1/16

印 张 / 37.25

字 数 / 1149千字

版 次 / 2010年11月第1版

印 次 / 2010年11月第1次

书 号 / ISBN 978-7-5628-2932-4/H·1039

定 价 / 198.00元

(本书如有印装质量问题,请到出版社营销部调换。)

如您对本书有任何建议,请联系: 941487073@qq.com

前 言

2000年,首届全国大学日语教学研究国际研讨会在同济大学隆重揭幕。时隔十年,2009年12月11日至14日,“第五届全国大学日语教学研究国际研讨会”再度隆重于同济大学召开。本次研讨会由教育部全国大学外语教学指导委员会、全国大学日语教学研究会主办、同济大学和上海对外贸易学院承办,有200多位来自国内外100多所高校、研究机构的专家学者参加了本次盛会。除了国内的媒体之外,日本社团法人日本語教育学会也在其会刊『日本語教育』145号(2010.4)上刊登了本次研讨会主办方成员徐曙教授撰写的会议报道。

在12日上午的开幕式上,教育部全国大学外语教学指导委员会副主任、大学日语教学指导委员会主任陈俊森教授、大学日语教学研究会会长成同社教授致开幕辞。日本国驻上海总领事馆前川光领事、卡西欧上海贸易有限公司总经理浅井龙雄先生、新世界教育集团总裁许玮先生、华东理工大学出版社副社长张辉女士等发表了热情洋溢的贺词。来自日本的著名学者尾上圭介教授和坂本惠教授分别为本次研讨会作了“日本語教育と日本語研究”和“日本語教育のスタンダード”的基调演讲。12日下午和13日上午,活跃在日语教育和日本学研究第一线的近200位与会代表围绕“日语教育及其相关研究”的大会主题,分散到本次会议设立的八个分会场,分别就日语教学、日本语言、文学、文化和翻译等进行了三十多个场次的分组讨论。13日下午的大会上,大学日语指导委员会委员赵华敏教授和国际交流基金北京日本文化中心王崇梁先生分别做了“全国大学日本語四、六級試験の改革について”和“新日本語能力試験の紹介”的精彩报告。

本次研讨会促进了大学日语教学与专业日语教学之间、日语教育研究和日本学研究领域的多层面、多角度的直接对话,活跃了学术气氛,促进了交流与融合。会议研讨热烈,气氛自由活泼,获得与会者一致好评。

本论文集正是本次研讨会成果的具体体现。研讨会召开以来,大会陆续收到近200篇论文稿件,经过论文集编委会认真审阅,从中筛选出了将近120篇论文汇编成本论文集。本论文集内容涉及面广,汇集了日语教学和日本学研究的最新成果。作者中既有学术界的前辈,也有日语界的新秀,还有未来之星的在读研究生。本论文集充分体现了本次研讨会学术研究与传承的基本特征和精神风貌。相信本次研讨会及论文集会对提高我国日语教育水平及日本学研究水平产生积极影响。

本次研讨会得到了日本国际交流基金、卡西欧上海贸易有限公司、新世界教育集团、华东理工大学出版社、高教出版社等机构的大力支持。论文集的正式出版,与华东理工大学出版社徐宏社长、张辉副社长及陈勤总编助理的远见卓识密不可分,在此一并表示衷心感谢。

第五届全国大学日语教学研究国际研讨会论文集编委会
2010年8月于上海

目 录

日本語教育

日本語教育のスタンダードズ

——東京外国語大学「JLC 日本語スタンダードズ」を中心に

..... 東京外国語大学留学生日本語教育センター 坂本恵(2)

時とともに進み、科学的な発展を求める

——全国大学日本語四、六級試験の改革について

..... 教育部高等学校大学外国語教学指导委员会委员 北京大学外国语学院教授 赵华敏(7)

基于“对话”的日语专业毕业论文指导的实践研究构想

..... 华中科技大学 陈俊森 杨秀娥(15)

日中小集团討論場面における修正ストラテジーの考察

..... 西安交通大学 赵刚 信州大学教育学部 徳井厚子(19)

大学(学部)における日本語教育実習「模擬授業」の試み

——多様な背景をもつ学生グループによる授業観察・評価活動

..... 東京学芸大学 齋藤ひろみ(24)

中国人日本語学習者の「～てくる」「～ていく」の習得に関する調査

——母語の影響という観点から

..... 北京师范大学 冷丽敏 孙艳艳(28)

中国語と日本語の間——中国人日本語教師の役割

..... 复旦大学 庞志春(36)

关于大学日语学生对称赞的应答方式问题的实证研究

..... 大连理工大学外国语学院 李筱平 周桂香 孟庆荣(43)

論理的思考力、表現力を養っていくための試み

——日本語上級コミュニケーショントレーニング導入に関する一考察

..... 东华大学 劳轶琛(47)

上海の大学における日本古典教育について——八級試験の出題傾向と関連して

..... 同济大学日语系 李宇玲(53)

中国語直訳により生じる日本語 FTA(面子を脅かす行為)

..... 上海对外贸易学院 市原明日香(58)

日本語学習者のアスペクトの習得——中国語母語話者を対象に

..... 九州大学大学院博士課程 盐川绘里子 浙江教育学院外国语学院 关冰冰(62)

「日本文化、日本社会」授業における関連キーワード、表現を取り入れる工夫についての試み

..... 香港城市大学专上学院 高桥李玉香(66)

ボライトネスの視点からみた日本語教育——中日初級教材の分析を通して

..... 天津师范大学津沽学院 关勇(70)

日本概況多媒体课件案例分析——以日本茶道为例

..... 北京第二外国语学院日语学院 詹桂香(74)

目 录

中国語を母語とする日本語学習者に対する教育法の思考 ——日本語精読の授業における第二言語習得への体得	天津商业大学 章莉(79)
大学初級日本語教育における「精読」と「多読」二つの授業モデルの比較研究	早稻田大学日本語教育研究科 华东师范大学日语学部 乔颖(84)
中国における日本語学習のためのwebリソースとその利用	福州大学 葛茜(88)
現場実践から見たビジネス日本語教育	电子科技大学 谭冰(93)
タスク先行型会話教材の開発及び試用報告——初級会話を中心に	孟庆荣 闻芸 周桂香(97)
从认知心理学角度试探日语演讲课程模式中即席演讲应具备的素质	沈阳师范大学 李红梅(101)
大学基礎日本語授業にグループディスカッションを取り入れる試み	大连大学 张晨曦(104)
内隐学习理论指导下的大学本科基础日语教学模式新探	绍兴文理学院外国语学院 李霞(109)
如何教授《日本史》课程	上海海洋大学 黄爱民(114)
上級日本語文学作品指導法をめぐって——「走れメロス」を中心に	天津师范大学外国语学院 于鹏(118)
日本語教育における経済・貿易コースの問題点について ——プロフェッショナル型人材育成を中心にして	大连大学 江春华 韩冰(122)
“大学日语”授课模式的实践探索——从语言生态学的角度	北京工业大学 刁榴(126)
关于教授报刊选读课程的思考	天津师范大学津沽学院 侯娟(130)
「中国中学に在籍する外国人生徒の言語環境及び二言語学習意識」についての一考察	东京学艺大学 付杰(134)
面向初级日语学习者开设的泛读课程的教学方法——以培养学生的文法意识为中心	天津师范大学 葛建敏(139)
论网络环境下的高校专业日语教学	北京联合大学 刘希玲(142)
高等院校日语专业开展商务日语网络课程教学的必要性探析	广州大学外国语学院 宋晓真 徐淑丹 张新(146)
日语专业职业能力教育现状及模式构建探索	西安交通大学日语系 张长安(150)
全方位培养听说能力 造就日语高质量人才	河南理工大学 李红(154)
中国における現職教員教育と教育大学の役割に関する研究 ——「教育修士専門職大学院」の役割と課題を中心に	上海对外贸易学院 张晶(158)

浅谈日本歌曲在日语教学实践的感想

..... 武夷大学日语教研室 黄文泉(162)

国人の日本語学習における動機づけの一考察——来日 3ヶ月の初級者を対象として

..... 东京学艺大学大学院教育学研究科修士课程 李爱花(165)

中学日语有效教学的初探

..... 上海市甘泉外国语中学 张婷(169)

论新日本语能力考试改革与对策

..... 许小明 (173)

日本語学

発想と表現からみる日本語依頼談話のしくみと指導

..... 信州大学 冲裕子 北京大学 赵华敏(182)

近 40 年日语词汇研究回顾(1)

..... 上海外国语大学 许慈惠 章虹(187)

日语“形容词”新构想——从认知语法角度

..... 上海对外贸易学院 徐曙(194)

アカデミックな場面で使用される名詞のコロケーション

——工学系話し言葉コーパスを用いた分析

..... 東京大学 文教大学

单娜 猪狩美保 菅谷有子 村田晶子 古市由美子 山崎佳子 山口真紀(203)

辞書にない日本語——若者言葉を中心に

..... 香港中文大学 方韵 小出雅生(208)

中国日语学习者作文中接续词的分布与类型——与日本本族语者作文对比

..... 上海交通大学 张建华(212)

言語行為論の「言語行為」と言語過程説の「言語行為」について

..... 洛阳外国语学院 许宗华(216)

指示詞についての研究——直指示との連続性から非直指示を考察

..... 同济大学 张颖(223)

池子里养着鱼⇒池に魚が飼ってある？ ——中日存在表現「V着」と「Vてある」をめぐって

..... 上海对外贸易学院 郑汀(228)

语言负迁移的分析及归因

..... 上海外国语大学 毛文伟(232)

日本汉语学习者偏误分析补遗(虚词篇)——兼与日语对比

..... 广岛大学 卢涛(236)

现代日语动词结合价的考察与分析

..... 上海对外贸易学院 黄晋(240)

日本語受身文の研究——『総合日本語』における受身文の説明への提案

..... 北京工业大学外国语学院日语系 顾春(244)

「もう／既に(すでに)…テイル」におけるテイル

..... 北海道大学大学院 刘晓娟(254)

断りにおける意味公式の分類法について	北京大学 杨久成(258)
日本語格助詞の重なる用法に関する考察	同济大学 李丽(262)
《形式視点》から《意味視点》へ	
——「太郎が/ は父に死なれた」と「王冕死了父亲」との対照研究からの示唆	上海对外贸易学院 何芳芝(266)
中国語における文法的比喩と過程の複合	
——中国語の複雑な意味のしかたについての一考察	同济大学 惠婷(271)
浅谈日语学习者对日语暧昧性的误解问题	东华大学外语学院日语系 朴惠英(275)
日本人大学生同士の会話に見られる否定的評価の発話の表現	筑波大学 関崎博紀(280)
談話の接続表現の使い方から見る日本語学習の問題点	同济大学 刘志昱(284)
中国学習者授受補助動詞の習得についての考察	洛阳外国语学院 李森(289)
文法化の視点から見る複合辞トコロヲの意味・機能	上海外国语大学贤达经济人文学院 陈文栋(293)
生産動詞とヲ格残存受身文に関する一考察	关西学院大学大学院/北京第二外国语学院 熊仁芳(298)
調整現代日本語活用表的设想——改革「学校文法」体系的构想之一	内蒙古师范大学 孟德巴雅尔(302)
同一性比較的日汉对比研究——以日语的「同じN」及汉语相应表达形式为中心	洛阳外国语学院 白晓光(308)
初対面の会話におけるヘッジの使用状況について——母語話者と外国人学習者の比較を通して	北京大学大学院博士后期课程 李凝(312)
合成動詞における後項動詞の補助動詞化	上海外国语大学贤达经济人文学院 沈悦(316)
意味分析と記述についての一考察——動詞を中心に	河南理工大学 段绪绪(320)
日本語の対談における引用表現の機能	
——元発話者が第三者である引用表現を中心に	西安交通大学城市学院 廖慧梅(324)
動詞の自動性・他動性と主語——認知言語学の立場で	上海海洋大学 黄春玉(328)
中日両言語における受身についての対照研究——中国語の意味上の受動文を中心に	天津师范大学 元世香(332)
中日名詞の動詞化に関する比較研究	江苏大学 姚伟杰 王保田(336)
日语的名詞疊詞的形态特点与语法含义	中国海洋大学外国语学院 修德健(341)

話し言葉の性差について——トーク番組を中心に	上海对外贸易学院 张婷婷(346)
日本語における形容詞の連体修飾について	上海对外贸易学院 刘洪蕾(350)
漢字の訓読みの定着	
——「常用漢字表」所載漢字の訓読みと「訓点語彙」との比較から	北海道大学 芮真慧(354)
日本語の男女差についての研究	沈阳师范大学 鲁畅(358)
日语中的性别指向用语及其社会性差异	上海对外贸易学院 孙爱妮(362)
小议「教える」一词的被动态用法	华东师范大学日语系 杨敬(366)
中日における注意書きの比較研究	哈尔滨工业大学 张红涛 广东商学院 平川美穗(370)
中日両国における漢字の形と意味の取り扱い——通時言語学の立場から	暨南大学外国语学院日语系 王宝锋(375)
学習者の立場からみる日本語の辞書	深圳大学 王岗(381)
音声即時処理型漢字テスト(漢字 SPOT)で測定する漢字能力	
——漢字圏受験者を中心に	筑波大学 杨元(博士后课程) 酒井たか子 加纳千恵子(385)
日语是特殊的语言吗——从语言类型学看日语	上海外国语大学贤达经济人文学院 李波(389)

日本文学

武田泰淳の“战场体验”与对华思考	中国人民大学 成同社(396)
日本女性主义文学发展简述	洛阳外国语学院 李先瑞(401)
不得不说的“秘密”的背后——以《破戒》《心》和《伤逝》为例	同济大学日语系 刘晓芳(405)
「没思想型文人」の西洋崇拜の原点を探る	
——谷崎潤一郎の幼少体験と近代都市観について	东华大学 钱晓波(410)
「その日」以降の松沢家	
——城山三郎『素直な戦士たち』読解への一視点	福岡工业大学 徳永光展(416)
漢籍における「かすか」な音声表現についての一考察	
——「切々」と「幽(咽)」をめぐる	同济大学 李晓梅(420)

遠藤周作における日本の精神風土の影響について ——『海と毒薬』から『沈黙』へ	洛阳外国语学院 史军(424)
太宰文学における女中と女給の系譜	河南师范大学 卢欢(428)
大江健三郎《同时代的游戏》论	河南大学 兰立亮(432)
《古事记》中倭建命的英雄形象之构建	天津师范大学津沽学院 高姗(436)
渡边淳一情爱文学的个性特点	哈尔滨工业大学 于桂玲(440)
《アサッテの人》的叙事策略	上海外国语大学 高丽霞(443)
日本的自然主义文学在中国的研究现状及思考——依据 CNKI 的数据	上海海事大学 余祖发(447)
偶然的“神隐”失语的“通灵” ——评村上春树的短篇小说《在所有可能找见的场所》	广州大学外国语学院 张敏生(454)
 日本文化	
论日本精神文化的根	天津师范大学 钟玉秀(460)
万世一系の日本天皇に関する研究——中国との比較という視点から	中国文化大学行政管理学科 苏俊斌(464)
对日本文化双重结构的思考——兼论中日文化之差异	深圳职业技术学院 贾华(468)
儒教の日本への流伝について	上海理工大学 赵立男(473)
京都祇园祭及其中国元素	同济大学 蔡敦达(477)
“天人合一”思想在中日两国茶文化中的不同体现	广东外语外贸大学 潘洁敏(482)
良宽其人与中日文化交流	湛江师范学院 陈俊英(485)
謝罪表現の日中対照研究——言語意識の観点から	青岛农业大学外国语学院 纪伟(490)
私にとってのことば・文化学習とはなにか ——「個の文化」の創出と第二言語学習	河南大学 郑宪信 北京日本学研究中心 李占军(495)
从日本的“国字”看日本人与自然的关系	上海对外贸易学院 盖横昊(500)

从中日语言中“虫”的意象看中日两国语言文化差异

..... 上海对外贸易学院 许磊(504)

ことわざから見た日本人の伝統の親子関係

..... 上海对外贸易学院 陈月琼(508)

歴史上における「鬼」に関する一考察

——中日の鬼のイメージ対照を中心に

..... 北京工业大学 王鑫(513)

中国文化在日本

..... 天津商业大学宝德学院 王健(517)

中日のひざまずきについて

..... 河南理工大学外国语学院 秦翠翠(521)

中日两国日本女性史研究现状

..... 北京理工大学外语学院 汤丽(524)

渡辺崋山の教育思想

..... 广东外语艺术职业学院 宋媛媛(529)

中日の贈答行為に関する比較研究

..... 广西师范大学外国语学院 李明华(532)

从便当看日本文化

..... 湛江师范学院 李海爽(539)

翻訳理論と実践

“形近神似”——和歌汉译的准则——以《源氏物语》“桐壶”为例

..... 日本大学 吴川(544)

七言诗形式的日本新体诗翻译——以土井晚翠的《星落秋风五丈原》为中心

..... 西安交通大学 金中(549)

汉日互译中的词汇空缺特征

..... 北京邮电大学 张丽颖(553)

日汉同形汉字词汇的翻译与教学

..... 北京工业大学 姜毅然(557)

中级日语教学中汉日翻译常见错误及其对策

..... 上海海洋大学 张秀梅(562)

翻译课中常见的母语干涉问题——关于“了解”和“理解”的细微区别

..... 北京工业大学 张婉茹(566)

浅论部分中文熟语日译的不可译性——从音声、语义角度

..... 江苏科技大学 张辉(570)

从选词初探汉译日中母语干涉问题

..... 浙江师范大学外国语学院 刘曼(575)

中日対訳に見られる擬態語の「ゆ」と中国語の“悠”

——統語的・意味的な異同への考察

..... 大连理工大学外国语学院 唐晓煜 闻芸 王玉明(580)

日本語教育のスタンダードズ

——東京外国語大学「JLC 日本語スタンダードズ」を中心に

東京外国語大学留学生日本語教育センター 坂本恵

1. 言語教育における「スタンダードズ」

言語教育において、教育の基準、段階などを示すものが存在する。アメリカでの“Standards for Foreign Language Learning”や“The ACTFL (American Council on the Teaching of Foreign Languages)”、カナダでは“Canadian Language Benchmarks”、またヨーロッパでは“Common European Framework of References for Language: Learning, teaching, assessment”（以下[CEFR]）^(注1)などであり、日本語教育の分野でも国際交流基金による「JFスタンダード」が2010年3月発表予定である。これらはいずれも基本的には言語能力記述文(Can-Do Statements)で、学習者の言語能力が記してあるものである。

なぜこのようなものができたかという、外国語の言語能力を誰が見てもわかるように、客観的に示す方法が必要になってきているからと言えるだろう。教育・学習・評価において、一貫していること、外部からも客観的に確認できるという透明性、ある一段階だけではない、連続して言語能力を見ることが求められているとも言える。そのため、外国語能力について、いくつ単語を知っているかといった知識面ではなく、コミュニケーションができるかどうか、という点に重点を置き、言語が使用される場面や状況、また社会文化的な要因と関連づけて明示したものである。また、言語能力を記す際に、社会的機能に焦点を当てたため、現実的でより観察可能なものになっている。

日本語教育の世界で考えると、学習者の日本語力を測るには、従来は日本語能力試験が最も広く使われる物差しであり、教育関係者であれば、1級、2級ということで、学習者の段階、レベルに見当をつけることができた。しかし、日本語学習者の増加、仕事や生活の中で日本語が必要になるに従い、日本語教育関係者以外の人でもすぐにわかる、能力基準を示すものが必要になった。特に企業等で日本語能力を客観的に知りたいという要求が強くなってきていると言える。そのため、1級、2級などではなく、あるレベルで、具体的にどんなことができるのか、ということを示す必要が出てきたわけである。そのため、何ができるか、というCan-Do Statementsで記述されたものが要求されるようになったと考えられる。これらの基準をここでは「スタンダードズ」と総称しておく。

東京外国語大学留学生日本語教育センターもこの「スタンダードズ」の開発を2003年から行っており、現在2009改訂版を出している。^(注2) この「JLC 日本語スタンダードズ」を中心に日本語学習における「スタンダードズ」について述べたい。

2. インハウススタンダードズ

CEFRは国境を越えた国際スタンダードズ、アメリカやカナダのものなどは国内の広い範囲で使うものであるナショナルスタンダードズであると言えるが、スタンダードズにはそのほかに「インハウススタンダードズ」が考えられる。インハウス、つまり、一つの教育機関内で作るものである。「スタンダードズ」は範囲、目標をはっきりさせないと作りにくい、ということを考えると、本来は

機関、プログラムごとにスタンダードズがあつてしかるべきであるとも言える。インハウススタンダードズはある言語教育機関での到達目標、教育内容、基準を示したものであり、教育の可視化、目標の明確化、教育方法の統一性を実現したものである。現在、いくつかの機関で作成の試みが始まっている。東京外国語大学留学生日本語教育センターでもそのような社会的な要請を受け、2003年から作成を開始したということである。

インハウススタンダードズを作る意味はいくつか考えられる。もちろん、その教育機関やプログラムでの教育の可視化などが進むことが最も大きな成果であるが、そのほかにも意義は多い。同じ機関、プログラムで教育をともに行っている教育者であっても、教育観や教育方法の違いがあり、実際に行っている教育にはかなり違いがあることが多いが、スタンダードズを作成する、考えることにより、機関内での対話が活発になり、意思疎通が図られることになる。これも一つの大きな収穫であると言える。

3. 「JLC 日本語スタンダードズ」

東京外国語大学留学生日本語教育センターでは40年にわたり、大学の学部に進学する国費留学生のための予備教育を行っている。近年、学生が多様化し、また、キャンパスの移転などによる学習環境の変化もあり、また、東京外国語大学に在籍する研究生や交換留学生、日研生などの非正規の学習者を対象にしたプログラムが発足するなど、これまでの教育を見直す気運が高まった。本センターの責務として、教育を可視化することも求められていた。そのようなきっかけからスタンダードズ作成は始まった。

様々な試行錯誤の結果、スタンダードズの範囲と目標を明らかにする必要を感じた。スタンダードズは言語能力を客観的に示した基準とも言えるものであるが、スタンダードズを開発して感じたのは、すべてに通用するスタンダードズはない、という逆説的な事実であった。スタンダードズは何かの枠をはめた、どのような目的で使う言語であるかということを明確にしない限り、作るのは困難である。例を挙げれば、「JLC 日本語スタンダードズ」は最終的にアカデミック・ジャパニーズに限定したものになったが、大学での使用を前提とした日本語と、例えば、生活の中で必要になる日本語はかなり違うものであることは理解しやすいだろう。この二つを同じ基準、同じ枠で見ることはできない。事実、CEFRでも、具体的な場面を提示して、その記述がなされている。例えば、基金のJFスタンダードは「相互理解のための日本語」を目標にしており、具体的には「課題遂行能力」「異文化理解能力」に重きを置いたものであると聞く。このように、どんなスタンダードズでも、その範囲を明らかにする必要があるのである。

本センターでは教育の目的を考え、アカデミック・ジャパニーズに限定したスタンダードズを作成することになった。ここで言うアカデミック・ジャパニーズとは狭義のもので、大学での授業に密接に結びついた日本語、自然な状態では学習者個人で習得しにくいものを対象としている。アカデミック・ジャパニーズは広義では大学生活の中で使われる日常的なやりとりなどを「キャンパス・ジャパニーズ」と称し、それを含んだものとして考えることもあるが、ここではそれを含まない、狭義のものとして考えている。スタンダードズの目的をはっきりさせるために範囲を限定して考えた。^(注3)

ここでいう、狭義のアカデミック・ジャパニーズは「学術的日本語運用能力」「日本語を用いた学術的相互交渉能力」(松本2004)^(注4)、「大学、大学院等での学術分野だけでなく、卒業後の職業生活や社会生活で営まれる知的活動を通して試用される高度な日本語」(山本2004)^(注5)などと定義されている。「専門的な内容」に対応する日本語、専門家として日本語を使うときに必要な日本語、内容重視の日本語ということもできる。具体的に言うと、きちんとした話し方ができ、文章が書け、専門書を読んで理解し、その内容を使うことができ、また、講義、講演、等を聞いて理解し、その内容のレポートが

書け、専門的な内容のやりとりができることなどを目標としている。

本センターで教育された学習者はその後、いずれも大学や大学院で勉学を行い、研究者になったり、あるいは、高度な日本語を身につけ、日本語で職業生活を行ったりすることが想定される学習者である。日本で教育を行っている以上、日常生活での日本語は生活の中で身に付けることも可能であり、必要なものは別途考えることができるということで、このような範囲で行うこととした。

「JLC 日本語スタンダード」とは「留学生が大学で勉強するために必要な日本語の習得のため、「聞く」「話す」「読む」「書く」に「話す聞く」を加えた5技能、初級から上級の5段階での各技能、各段階での行動目標を優先的に示したもの」である。具体的には、各技能で到達すべき「ゴール」に向かって各段階でどのような教育が行われるべきかを記し、そのゴールに向けての各段階での行動目標、スキル等を記したものである。各技能別に 大学での勉学に関わる課題を遂行するために求められるものとして、運用力を中心とした熟達度、能力記述を中心とした「ゴール」を設定してある。各技能のゴールは以下の通りである。

「聞く」：講義、口頭発表がわかる

「話す」：研究発表ができる

「話す聞く」：質疑応答・ディスカッションができる

「読む」：専門書が読める／文献・資料が読める

「書く」：レポート、入試などのための小論文、研究計画書が書ける

要素としての文型、語彙等は土台として必要なものではあるが、これをどのように扱うかについては今後の課題となっている。

4. スタンダードに残る問題点

学習者の日本語力をはかるためのものとしてスタンダードを考えると、日本語能力試験などの試験とはどのように異なるのかと考える人も多いに違いない。日本語能力試験は基本的に知識、理解を等ものが中心である。実際、試験項目としては文法、語彙、読解、聴解であり、知識、理解力を測るものであることがわかる。これに対し、スタンダードはそのレベルの言語能力を持っていればどんなことができるのか、逆に言えば、このようなことができるものをこのようなレベルであると認定する、ということを示している。つまり、どんなことができるかという実践的な面を考慮したものであり、日本語能力試験にない表現系の技能の力を表すことに向いているものであると言える。

そのため、スタンダードでは、このレベルで何ができるかということは示されるが、日本語能力試験で示されるような、このレベルでどの程度の語彙力や文法力を持っているか、という知識面は問うていない。実際には、例えば研究発表を行うためには、それに必要な語彙、表現するための文法知識なども必要となるわけで、スタンダードでは知識面は問わない、というわけではない。ただ、知識を持っているということより、その知識をどのように使うかに焦点を当てたものであり、あることをするのに必要な知識は何か、という観点から考えたものなのである。そのため、どのレベルにおいてどれだけ知識があるか、という基準は今のところ設けていない。

この場合、一つの問題が生じる。このスタンダードに基づいて言語プログラムを構成する場合、学生のレベル分け、プレースにスタンダードを使うことができるか、ということである。本来であれば、スタンダードに基づいたレベル分けを行うべきであるが、現在本センターで行っている教育でも学生をレベルごとにプレースするためには、知識面、文法、語彙を中心にしたプレースメントテストを作っている。この文法、語彙力で測ってレベルを分けた学生に、スタンダードに基づいた教育を行って、教育が終了した段階では、スタンダードに示してあるような力をつけさせる、と考えればよい。いわば、入り口と出口、というように考えることができる。スタンダードは一つの教育機

関、プログラムでの教育の方法、中身を示したものであるから、これを他の機関に求め、その力があるかどうかの基準とすることは難しいようにも思われる。

もう一つの問題としては、「評価」、達成基準認定方法をどうするかということがある。知識(語彙、文法)はテストで測ることが比較的容易だが、運用力を客観的なテストで測るのは難しい。また、聴解、読解といった理解系の技能であっても、より上級になればなるほど、選択肢形式の問題になじまないと言える。例えば、この文章全体で言いたいことは何か、的確に内容をつかんでいるかどうかなどということは選択肢から選ぶことは比較的容易だが、自分でその答えを出すのは難しく、それができるかどうかは書かせたり、言わせたりしなければわからない。その意味で、「客観的なテスト」が難しい分野であると言える。口頭表現、文章表現といった運用力を見るためには、試験官を訓練する必要のあるようなテストが必要になるのかもしれない。

現在本センターでは、大学学部に進学させるための予備教育の最後の段階の試験として、口頭表現では短い話をさせるテストや口頭発表を、文章表現では評価基準を明確にした文章を書かせるテストと小論文、聴解では細部を問う選択肢、○×問題の他に、要約、ノートを書かせるテストを行っている。読解に関してはほぼ選択肢による客観テストを行っている。運用力を測るテスト、上級段階での理解力を測るテストの開発も必要になると言える。この点は今後の課題である。

5. 実際の教育への応用

スタンダードはいわば骨組み、概要であり、実際の教育に応用するためには、いくつか必要なことがある。これにもいくつかの具体的な方法が考えられる。

スタンダードで考えられた教育方法を実現するために、実際の教育プログラムをどのように組み立てていくか、ということがある。実際の教育プログラムでは、スタンダードにあげてあること以外にも必要に応じてクラスを追加することもある。例えば、本センターの交換留学生などのためのプログラム「全学日本語プログラム」では全8レベルに分けて教育を行っているが、中級以上は基本的に総合週5コマと技能別クラスを5ないし6設定している。総合のクラスでスタンダードに準拠した教育を中心に行うが、技能別のクラスでは、例えば口頭表現ではキャンパス・ジャパニーズで求められるようなことも取り入れるなど、学生のニーズに合わせて教育を行っている。

次に、スタンダードに準拠した教材を作成する必要がある。現在本センターでは、スタンダードに準拠した教材として、『新版初級』、『新中級』教材の開発が進んでいる。このほかに、聴解教材として、『役に立つ聴解』『ミニ講義』(いずれも仮題)の作成が進んでいる。口頭表現、文章表現でも教材開発が進んでいる。スタンダードは教材を開発する際の基本方針、初級、中級など各レベルの調整や、各技能間の連絡を取るために必要となるものである。教材開発のコンセプトと深く関わってくるものである。

最後に、スタンダードに基づいて、どのような授業が展開できるのかを紹介する。実際の授業を例に、上級段階の聴解の授業のシラバスを以下に示す。このシラバスはJLC日本語スタンダードの聞く「上級」に基づいて作成している。実際の授業では、テレビ、ラジオ番組の視聴の他、スタンダードに基づいて作成した教材や、ミニ講義を使っている。ミニ講義は20分程度で一つのトピックを専門家に講義してもらったものである。ミニ講義を視聴して、ノートを取ったり、要約を書いたりする練習を行っている。上級段階の学生は、テレビ、ラジオやミニ講義も、聞けばだいたいことは理解できる。しかし、それを聞いて、講義者の言いたいことをつかんだり、完結した論述の構成、社会科学系であれば、導入、問題提起、定義 現状、対策 今後の課題、そして、具体例や脱線部分であることなどを理解することは意外に難しいものである。聞き手の興味を引くための具体例や導入部の「つかみ」の部分のみに気を取られ、本当に伝えたいことを聞き逃す学習者も多い。講義の中での位置づ

け、意味づけがわかり、段落、部分ごとに自分の言葉でまとめることができる力を養成することこそがJLC日本語スタンダードで目指す聞く能力である。

全学日本語プログラム 2009秋 上級2聴解713 (シラバスの一部)

授業の目標

- ・論理的・抽象的な内容の解説、スピーチがわかる
- ・意見を批判的に聞ける
- ・明示されていない含意、意見がわかる

獲得できるスキル

- ・講義のノートがとれる
- ・話し手の意見、評価を予想できる
- ・背景にある事情を推察して聞ける

授業内容

教材、講義、テレビ・ラジオ番組を視聴し、
ノートを取る・要約を作る・ディスカッションする

専門用語を理解する・修辭的な表現、婉曲的な表現を学ぶ

注

- ① (吉島茂/大橋理枝訳・編2004)『外国語教育Ⅱ 外国語の学習、教授、評価のためのヨーロッパ共通参照枠 “Common European Framework of References for Language: Learning, teaching, assessment”』朝日出版社
- ② 『JLC日本語スタンダード2009改訂版』東京外国語大学留学生日本語教育センターなお、これに関連して、本センターでは、文部科学省大学改革推進等補助金「質の高い大学教育推進プログラム」として「世界的基準となる日本語スタンダードの構築－留学生のアカデミックな日本語力の飛躍的な向上を目指す－」を獲得している。本事業については以下を参照 <http://www.tufs.ac.jp/common/jlc/jlc-gp/>
- ③ (角倉・筒井・三宅2006)『アカデミック・ジャパニーズの挑戦』ひつじ書房など
- ④ 佐藤政光2004 「東京外国語大学留学生日本語教育センター移転記念シンポジウム－アカデミック・ジャパニーズを考える」での講演 (東京外国語大学留学生日本語教育センター2007)『JLC日本語スタンダード 中間報告2007』
- ⑤ 山本富美子2004 同上

時とともに進み、科学的な発展を求める

——全国大学日本語四、六級試験の改革について

教育部高等学校大学外语教学指导委员会 委員
北京大学外国语学院 教授 赵华敏

全国大学日本語四、六級試験は1993年6月から実施して以来、四級は2008年6月まで17回行われ、六級はそれまでは一度も行われなかった。2009年6月からこの四、六級試験は新しい形式の試験として登場し、大学日本語に新たな春風を送ったと言えよう。

本稿ではこれまでの四、六級試験を振り返り、なぜ改革が必要だったのかを述べ、新しい形式の四、六級試験を紹介する。その上で、四、六級試験の将来を展望し、更なる発展を促すことができればと思う。

1. これまでの全国大学日本語四、六級試験

1.1 「大学日本語」とは

中国の日本語教育は学習者が多いということはいろいろな調査で知られている。主な教育機関は中・高等学校と大学だが、大学はその主流で、学習者が世界で最も多いといわれている。大学における日本語教育はさらに専攻日本語と非専攻日本語に分かれ、非専攻日本語はここで言う「大学日本語」に当たる。

「大学日本語」は第一外国語(中・高等学校で日本語を勉強し、大学受験で日本語の試験を受けた学生を対象とする必修科目)、第二外国語(ゼロスタートの学生を対象とした選択科目)、副専攻としての日本語(補修)などが含まれる。

1.2 大学日本語四、六級試験

この試験の受験者はここで言う非専攻日本語の学習者を対象に行われる試験である。が、第一外国語として勉強する学生が試験の対象とセッティングされていた。

冒頭で述べたように日本語四、六級試験は1993年6月に初めて実施し、2008年6月まで17回行われ、六級はいろいろな原因で一度も行われなかった。2008年6月までの各回の四級試験の実施時間と受験者数は以下のとおりである。

実施時間	受験者数	実施時間	受験者数	実施時間	受験者数
1993年6月	5210	1999年6月	8778	2004年6月	16572
1994年6月	5466	2000年6月	8969	2005年6月	14467
1995年6月	6629	2001年6月	10866	2006年6月	14006
1996年6月	6257	2002年6月	12810	2007年6月	12085
1997年6月	7844	2003年6月	11496	2008年6月	10523
1998年6月	8547	2003年9月	2389		

(全国大学英语四、六試験事務局が提供した数字による)